

# 日本版への序

ミック・ウェスト

2007年の日本旅行で尋ねた東京の靖国神社遊就館には忘れられない思い出がある。入館当初は、日本の戦争の歴史について、古代の鎧から20世紀の戦車や戦闘機までを展示している、よくある戦争博物館だと思った。

だが、展示を辿っているうちに第二次世界大戦の開始についてのコーナーに来た。シンプルに年表といくつかの写真と説明板があるだけだったが、私は説明を読んで非常に驚いた。日本は防衛のために戦争に追い込まれた。石油禁輸などの米国の行動が日本の生存を脅かし、こうした米国の敵対的行為に対して真珠湾攻撃を戦略として取らざるを得なくなったと書いてあったからだ。

私は1930年代、40年代の地政学に特に詳しいわけではないが、この説明は非常に奇妙に思われた。私は英国育ちだが、こうした説を聞いたことはなかった。写真を撮って、あとでこの主張について調べたいと思ったが、写真撮影は禁止されていた。

私たちは初めての日本旅行プランに山のように観光名所を詰め込んでいて、その一つとしてここを訪れただけだったが、困惑感はずっと後を引いた。2か月後、偶然にも真逆の旅をすることになった。真珠湾とワイキキ海岸のあるハワイのオアフ島を訪れたのだ。この旅で日本での体験がさらに深く記憶に刻まれることになった。

私たちはパールハーバー（真珠湾）国立記念館に行った。ここでは小さなボートに乗って、アリゾナ記念館に行ける。記念館は沈没した戦艦アリゾナの残骸の上につくられた飾り気のない部屋だ。ボートの順番を待つ間、本館の展示を見た。

私は真っ先に真珠湾攻撃に至るこの地域の出来事を論じているセクションに向かった。遊就館で見たのと同じような出来事が取り上げられていた。もちろん展示内容は大きく異なっていた。遊就館は日本の中国に対する行動を地域の安定を図り日本の国益を守るためのものとして描いていたが、アメリカの博物館では拡張主義による侵略行為として描いていた。

その中でも私が衝撃を受けたのは、盧溝橋事件の説明だった。短い動画が繰り返し流されていて、アメリカ人ナレーターが冷笑的で嫌悪感に満ちた調子で、

「盧溝橋における（日本軍の）卑怯な攻撃」と解説していた。だが私は遊就館で見たばかりの臆病な中国兵の攻撃を勇敢に退け、橋を防衛した日本軍という解説を思い出していた。

私は本書を米国カリフォルニア州に住むイギリス人としての視点から書いた。取材対象は全員アメリカ人で、取り上げた陰謀論もケムトレイル、911、選挙不正、そしてUFOでさえ、主にアメリカの流行だ。

そういうわけで、私は当初、この本の内容を日本の読者に向けてうまく翻訳できるのだろうかと懐疑的だった。アメリカと日本は非常に異なった国だ。アメリカ合衆国は比較的若い国で、独立戦争によって生まれ、いまだに南北戦争の残響に苦しめられている。多くのアメリカ人は独立戦争の反抗の伝統を引き継いでいて、権威の否定と個人の自由を熱烈に信じている。これが、権力の座についている人々への疑いを育てる温床となってそこから陰謀論も生まれる。

対照的に、日本には米国とはまったく異なった文化と歴史的背景がある。古代から続く深く根付いた伝統を持つ国である日本は、和と調和性と権威の尊重を重要視する。日本に普遍的な意識は個人主義よりも社会的な結束を優先するので、政府や権威団体への疑いは薄れがちだ。集団の合意と安定性に重きを置く日本社会の環境では、広範囲で陰謀論を受け入れるのは難しいはずだ。

国としてみれば日本と米国は大きく異なっている。だが、人類学によれば2つの集団の差は、その集団内の個々人の差より小さいことも多い。言葉の問題を別にすれば、ニューヨーク市のティーンと京都のティーンの二人の差は、保守的なアイオワの農場の少年とサンフランシスコのドラッグ・クィーンとの大きな差と比べればずっと小さいだろう。

本書のテーマの一つは、陰謀論は信じるか信じないかと白黒付けられるようなものではないということだ。大変広いグレーの領域があって、濃いから薄いに至る連続体になっている。個人は（陰謀論者であってもなくても）、誰もがこの連続体のどこかに位置している。遊就館と真珠湾記念館の展示の解説は2つの国の信念の両極ではない。どちらの国でも第二次世界大戦についての信念には大きな振れ幅があるのだ。

日本では遊就館博物館は論議的で、私が見た展示解説は、現在はむしろ少数派のものだろう。だが、日本の軍事行動が侵略行為だったか、必要な防衛行為だったかについて人々が信じているところは、現在も多様な意見が連続体として存在する。

米国では、退役軍人は一般に尊敬される存在だが、過去と現在の両方の戦争について、多様な意見がある。よく論じられるのはベトナム戦争だ。近代以降、米国が国土を侵略されたことは無いが、ベトナム戦争の敗北は癒えない傷であり、正当化を求める故に異説が発生する。

陰謀論的思考はその国の文化を反映していることが多いが、ここで我々が関わろうとしているのは国ではなく、個人だ。日本でも多くの人が陰謀論を信じている。国産のものもあるが、他の国から輸入されたものもあり、UFOのように国境を越えているものもある。

日本に輸入された陰謀論の一つが、本書でも最も多くのページを費やしたケムトレイルだ。飛行機の後ろに生じる白いものは、科学が言うような飛行機雲ではなくて、邪悪な政府が天候、あるいは人口をコントロールしようとして噴霧している化学物質か何かだと説くものだ。

この陰謀論は米国で1990年代に始まったが、単純な説でどこでも通用する（空の飛行機雲が見られればいい）ため世界中に広がった。日本版も基本的にはアメリカと同じで、米国の情報源を根拠としていて、日本語でもケムトレイルと呼ばれている。

例えば日本ファクトチェックセンターのページは日本語のケムトレイルについてのツイートを例に引き、北海道大学の航跡雲についての論文（「飛行機雲の偏波ライダー観測」北海道大学地球物理学研究報告, 66, 11-31）を参考文献としてあげている。だが同時に米国環境保護庁、英国航空パイロット協会や本書でも取り上げたデイビッド・ケイス教授など西欧の情報源にも大きく依存している。

これから考えるに、本書のケムトレイルの各章の事実解説はすべて日本にも該当する。同じ主張に対してのデバンキングとしては、同じ解説が有効であるはずだ。

日米で大きく重複が見られるもう一つのテーマはUFOだ。最近ではUAP（未確認異常現象）と呼ばれているが、UFOはアメリカ文化の一部だ。そのルーツは1948年にニューメキシコ州ロズウェルで起こった事件にあり、これはUFOコミュニティでは異星人の宇宙船の墜落事故だったと信じられている。その後1950年代は全米で空とぶ円盤ブームが起こった。この時期は米国とソ連との間で緊張が高まり、人々は空からの攻撃がいつ起こるだろうかとピリピリしていた。

UFO人気は盛衰を繰り返してきた。70年代と80年代には『未知との遭遇』の公開や、『Xファイル』のようなテレビドラマの影響でブームが再来した。最近

では米国の UFO 研究を目的とした秘密計画についての話と、これに関連するという一連の公式動画によって、再び一般の興味が高まっている。

こうした米国の UFO 事情は日本の UFO 学にも直接影響している。ロズウェルは基本的な事件としてよく知られていて、「アンビリーバポー世界の何だこれ!? ミステリ」や「TV チャンピオン」などの番組にも取り上げられている。荒井欣一などの日本の UFO 研究家はこの事件についてよく引用しているし、ポップカルチャー、映画、アニメ、漫画のテーマとしても登場している。

日本には独自の地方色豊かな UFO 事件もある。甲府市は 1975 年に二人の子どもが「宇宙人」を見た事件（甲府事件）やほかの最近の UFO 目撃事件をアピールしていて、日本のロズウェルになろうとしているかのようだ。

さらに最近の米国の出来事についても、日本で同様の動きがある。2022 年 7 月、米国政府は防衛省に AARO (the All-domain Anomaly Resolution Office : 全領域異常解決局) という UFO 調査部門を設置した。呼応するように米国の政治家たちの中から UFO 調査を一般に広げ、政府へ隠蔽中止を働きかけようとする UFO 議員グループが出現している。

2024 年に浜田保一元防衛大臣を初めとする日本の政治家たちもよく似たグループを立ち上げた。この UFO 議連の目的は政府に UFO 調査をするように働きかけ、米国の UFO 調査に協力するために AARO のような組織をつくるように求めることだ。

UFO はパイロットが空に確認できないモノを見ることがあるという点では現実の問題だ。人々が政府は事実を隠蔽していると考え始めた時に、これは陰謀論になる。UFO の章で書いたように、政府が真実を隠蔽しているという証拠は、ほばない。だがかなり多くの UFO 愛好家が、自分の個人的体験に基づいて UFO は異星人のものだと信じている。これは日本でも同じなので、UFO の章の私のアドバイスは日本人にも同様に役に立つだろう。

UFO は異星人の宇宙船だと信じていても、ちょっとばかり馬鹿げた趣味だというだけで、無害そうに思える。だが、この説は政府による隠蔽を必須の前提としているので、政府への不信感を産む。そこから選挙結果への不信感やワクチンなどの「公的な」科学への不信に繋がっていくこともある。

本書で扱ったテーマの中には、さらにアメリカ特有のものもある。一番わかりやすいのは選挙不正だろう。ドナルド・トランプは、候補者の勝敗とは無関係に米国の選挙には不正があったと考える人々の大幅な増加に大きな責任がある。これは間違いなく 2024 年、そしてそれ以降の選挙に大きな影響を及ぼすだろう。

日本では選挙不正があったとする主張ははるかに少ない。一般に選挙システムは平等でしっかりしていると考えられているからだ。しかし、陰謀論は加速度的に世界化していて、米国の選挙に不正があったと信じる意見は日本の読者の友人家族の世界の仕組みへの理解を大きく左右する可能性があり、また自国の政府を見る目に影響するかもしれない。

アメリカの選挙不正陰謀論は複雑であることが多く、説明の試みはさらに複雑になってしまう。日本の読者にとって、アメリカの陰謀論の詳細はそれほど興味を引かないかもしれないが、この手の陰謀論の大きな枠組みを理解し、その説明も存在することを理解するのは、それでも大切だろう。もし、将来日本で選挙不正陰謀論が発生することがあれば、このドナルド・トランプの誤った主張の一部を真似たものになるだろう。一度は上手く行った実績があるからだ。

すでに日本人に向けに転用されているアメリカの陰謀論と言えばQアノンだ。Qアノンは米国の極右陰謀論で2017年に出現した。この説によれば、悪魔崇拝で小児性愛者の秘密結社が米国政府とメディアを含む世界中の組織をコントロールしているという。信者はトランプ元大統領がこの秘密結社と戦っていると信じている。この陰謀論は主にSNSを通じて広がり、トランプ在任中の期間目覚ましい求心力をみせた。Qアノンは、詳細に至るまでデバンクされているにもかかわらず、現実世界での動きに影響を与えている。最も大きなものは、2021年1月6日の米国議会乱入事件だ。政府と主流メディアへの不信の広がりを反映し、反権力思想を持つ個人に訴えかける事件となった。

Qアノンは日本のある種の極端な考えを持つ人々、特に反権威的な人々の共感を得た。2018年頃から注目され始めた日本のQアノンは、Jアノンと呼ばれることもある。

奇妙な悪魔絡みの説に立脚しているQアノンだが、政府に疑惑の目を向ける人々すべての受け皿になってきている。Qアノン信者は、政府を悪の存在として提示する陰謀論であれば何でも簡単に信じる傾向がある。このため、すべてのQアノン信者は、ワクチンは政府が提供するからという理由で強硬な反ワクチン主義となる。

これは日本でも同様だ。2022年4月、<sup>やまもと</sup>神真都QというQアノン系グループが渋谷でコロナワクチンを提供していたクリニックに乱入した。ワクチンは人々をコントロールしようとする政府の計画の一部だと主張しており、またコロナ感染症は存在しないと主張していた。

日本のQアノン信者数は米国よりも少ないが、ウサギ穴に吸い込まれた人が

受ける悪影響の深刻さは同じだ。2023年3月19日付けの朝日新聞の記事「陰謀論信じる父、息子の苦悩 『ワクチンの話、ケンカになるだけ』 逮捕後も考え変えず…（日本では2月28日付け）」はニューヨークタイムズやほかの（米国の）新聞に載っている記事とまったく同じだった。

息子は父親がコロナ禍の最初の1年で孤立し、Qアノン（その後、神真都Q）に魅入られて行った過程を語っている。父親は、コロナはでっち上げだ、アメリカの選挙は不正だった、邪悪な秘密集団が世界を操っていると確信するようになっていった。

父親はその後、神真都Qグループのクリニックへの抗議に加わり逮捕された。家族はそれによって法的、金銭的に大きな影響を受けた。

記事はウサギ穴の奥深くに落ちてしまった家族と接触を続けることの重要性を告げ、また救出の特効薬—誰にでも使える万能の方法はないと知っておくべきだとしている。

日本には、もちろん日本で発生した陰謀論もある。遊就館の説明板に影響を与えた説のように、古くからあるものもある。例えば、右派は第2次世界大戦中の南京大虐殺を否定したり、矮小化したりする。報告されている残虐行為は中国や西側諸国によって誇張され、あるいは捏造されたと考えられると言うのだ。

欧米の陰謀論や、出来事をなぞるようなものもある。様々な「731部隊」陰謀論は戦時中の部隊によって行われた人体実験の真実は隠蔽され、同様の人体実験は現在も続いていると主張している。これはアメリカの陰謀論信者の一部がタスキギー梅毒実験という歴史的事実が、ケムトレイル陰謀論の証拠だと信じるのと似ている。

大きな出来事、特に死や健康に広範囲に影響するものは、なんであれ陰謀論を生む。これは日本でも真実だ。2011年の東北大震災はアメリカのHAARPが起こした地震だとされている。大きな台風はケムトレイルのせいだと言われる。

幸いにも日本ではアメリカに比べて無差別銃撃や他の攻撃的な事件はめったに起こっていないが、事件が非日常性的であればあるほど極端な印象と疑惑に繋がりがやすい。オウム真理教の地下鉄テロはボストン・マラソン事件と似た陰謀論を生んでいて、やらせだったとか、事実が隠蔽されているとか、対応が早すぎて政府が関与していたに違いないとか言う人がいる。

2011年の福島第一原発事故はチェルノブリ以後最も深刻な原発事故だった。事故後の健康被害への恐怖は陰謀論の豊かな土壌となっている。



米国や中国が何かの目的で人工地震を起こしたという説に加えて、最大の陰謀論は事故の本当の規模が隠蔽されているというものだ。事故後数か月に渡って、核物質が漏れ出して、世界中で大量の死者が出るだろうという荒唐無稽な説がいくつも唱えられた。

これは米国には似たものはなく、911テロで崩壊したビルの塵芥が毒を含んでいるというものがかろうじて類似している。したがってこれは日本から米国に輸出された陰謀論の希少な例かもしれない。

日本と米国（あるいは英国）は異なっている。国によって生まれる陰謀論も異なっている。Qアノンのように両国に同じ陰謀論がある場合でもローカル版が出てくる。

だが非常に似通っている面もある。我々はすべて同じ懸念に躁られるのだ。健康を心配し、政治家や大企業が非道な行いをしているのではないか、自分たちは搾取されているのではないかと疑念を持つ。世界がなぜこうなるかはいつも不明で、この不確かさに駆り立てられて説明のないところに説明を求めようとしてしまう。

国民は個人の集まりだ。ウサギ穴に落ちてしまった人を上手く救出するためには、国別の統計は役に立たない。平均と流行から「こういうわけでこの人はこうなった」と言うことはできない。

私は本書で人と陰謀論は連続体として存在することを説明し、誰かを救い出すためには本物の会話が必要だと説いている。この会話をするためには、相手が陰謀論スペクトラムのどこに位置するかを知らなくてはならない。神真都Qが何を信じているか、遊就館の展示が何を言っているかではなく、その人が何を信じているかを知らなくてはならないのだ。

同時に重要なのは、相手が何を信じていないかを知ることだ。境界線をどこに引いているか。推測は無用だ。相手に尋ねよう。話をしよう。本物の会話は共通認識の上に成り立つ。相手を理解する必要があるし、相手もあなたを理解しなくてはならない。

本書で取り上げた例は米国のものではあるが、読者が類似性を、特に脱出経験者の体験談から類似性を読み取ってくれることを願っている。あなたの大切な人は、それぞれが独自の道を辿って今のような陰謀者になった。地域的な要因もあるだろうし、外国からの影響もあるかもしれないが、人生経験そのものが陰謀論へと導くこともある。

助け出してほしくなんかない人を助けようとするのは、エネルギーを奪われ、苛立ちも募る仕事で、何の進展も感じられないことも多いだろう。だが、人は脱出する。思ったよりも長くかかることもあるだろうが、誰でも脱出して現実に戻ってくることが出来る。脱出した人には片足であっても現実に足がかりを持つ助けをしてくれた友人、家族がいることが多い。どの国の人であっても、誰でもウサギ穴からの脱出は可能で、あなたはその手助けができるのだ。



# 概要

陰謀論からの救出は3部構成になっている。第1部では陰謀論のウサギ穴を詳しく見ていく。なぜ陰謀論は存在するのか？なぜ人々は陰謀論に吸い込まれるのか？どうやれば助け出せるのか？

第1章「陰謀論陰謀説」は、議論の多い陰謀論という用語をその歴史から見ていく。この言葉は、1963年のケネディ暗殺以前から使われていて、一部否定的なニュアンスを内包しているものの（完全にではないが）よく理解されているので、私はこれを使っている。

第2章「陰謀論スペクトラム」では、説得力のあるものから、バカバカしいものまで、多様な陰謀論の種類を見ていく。私はここで、人が自分の陰謀論スペクトラムに線引きする陰謀論の「境界線」という概念を提示している。この線の一方には彼らにとって「まともな」説があり、もう一方には「くだらない」説と「誤情報」がある。友だちを助けるための鍵は、この線を理解し、発見することにある。

第3章「作業員」は、ウソ陰謀論をデバンクしようとする人がよく出会う、「作業員」という誹りを取り上げる。この誹りと戦う最も良い方法は、できる限り正直に自分が何をしているのかを公表することだ。その実践として、この章で私がどうしてネット上の陰謀論のデバンクをするようになったのか、なぜやっているのか、なぜ続けられるのかの詳しい説明をしている。

第4章「ウサギ穴：状況と理由」では、人々がどのようにウサギ穴に吸い込まれるのかを検証している。心理学的要因はどのように作用しているのか？陰謀論スパイラルの中で、人はどうなってしまうのか？陰謀論に関わる研究の現在とネット動画の果たす特記すべき役割を見ていく。

第5章、「デバンキングの基礎技術」は、実際のデバンキングに使えるツールとガイドラインのセットを提示している。この技術の要となるのは欠落情報の効果的なコミュニケーションだ。

第6章「スティーブの場合——ウサギ穴を抜ける旅——」は、1970年代からの陰謀論者スティーブがいかにウサギ穴から脱出したかの物語で、その内容はこままでの章で扱ってきたコンセプトの多くの例示となっている。

第2部は本書の実用的な中心部だ。4つの異なった陰謀論について、深く掘り下げていく。よく見られる間違った主張の根拠を説明し、友だちに対してどのようにこの説明を伝えるのが一番良いのかを解説している。それぞれの陰謀論のウサギ穴に落ちていき、最後には脱出した人の体験も含まれている。

第7章「ケムトレイル」は、飛行機が空に残していく白い筋はただの雲ではなく、気候を変えようとする秘密の計画の一部なのだという、驚くほど信じる人が多い考えを取り上げる。飛行機雲の科学（これが白い筋の正体なのだが）を取り上げ、よく言われる「飛行機雲はすぐに消える」、「雨にはアルミが含まれている」、「気候エンジニアリング特許」などについても説明している。個人的にこの陰謀論が私の最も得意とするところなので、この章が一番長くなっている。

第8章「シュテファニー——元ケムトレイル信奉者——」は友だちの助けでウサギ穴を脱することができたドイツのケムトレイル信奉者シュテファニーの物語だ。

第9章「911 制御爆破解体」では多様な911陰謀論のうち、最も人気のある世界貿易センタービルの倒壊は飛行機の衝突と火事だけでは起こりえない、事前に仕込まれた爆薬が使われたに違いないという説を見ていく。1つの章で十分に完全な評価を示すには大きすぎるテーマなので、ここでは、友だちが知らないであろう、鍵となる部分の情報に焦点を置いた。具体例をあげれば、911の真実を求める建築家とエンジニアというグループについて、ナノテルミット、国防省に激突した飛行機、失われた（わけではない）2兆3億ドルとなる。

第10章「カール——一時的な真相解明運動家——」は、危うく911のウサギ穴の奥底深くまで落ち込むところだったが、友だちの救出が間に合った人の話だ。

第11章「偽旗」は、「サンディー・フック小学校銃撃事件はやらせだった」のようにはしばしば感情的になりがちな主張の問題を扱う。歴史上の偽旗の例としてよく引用される事例、とくにノースウッズ作戦とトンキン湾事件について詳しく検討した。私はここでこのタイプのウサギ穴に落ちた人に、なんとか大局的な見方をしてもらえるようにする方法を探っている。

第12章「リチャード——サンディー・フック小学校銃撃事件で限度を知る——」はサンディー・フック事件はやらせ説をきっかけに陰謀論的思考から遠ざかることができた若い男性の話だ。

第13章「平面地球」は、ほとんどの人がどう見てもバカバカしい説だと考えている地球は平らなのを政府が隠蔽しているという説を取り上げている。この説

の信奉者だという人の多くはただの荒しだが、もし本気で信じている人に出会ったらどうするか？ この章では、この説の歴史、最もよく見かける主張、そして直球で地球は平面ではないと証明する方法について書いている。

第14章「ボブ——平面地球からの脱出——」は、地球は平らだと信じただけでなく、家族にも信奉者がいた人の話だ。

第3部はこの本の初版が発行されて以降目立つようになった活動中の陰謀論に焦点を当てている。これらの陰謀論は複雑で変化が激しいのが特徴で、信奉者との会話は簡単にはいかないし、我々のメソッドも対応できるように調整し、新しいツールも必要になる。

第15章「変化の激しい陰謀論」は選挙不正説、Qアノン、コロナウイルス、UFOの4つの陰謀論の概要を述べ、こうした変化の激しい陰謀論についていくために必要となるだろう調査のためのツールと情報源について解説している。

第16章「選挙不正説」では2020年米国大統領選を巡る陰謀論を見ていく。最初は2016年の選挙でトランプによって知られるようになった陰謀論だが、2020年にトランプが敗北してその選挙結果を認めなかったときに主流化した。何百万人というトランプ信奉者もトランプの拒絶を受け入れ、選挙不正に関する陰謀論増殖の基盤をつくり、これが、2021年1月6日の議事堂乱入事件へと繋がっていった。ここではいくつかの特徴的な事例を詳しく検証し、この話題で話をするときの全般的なアドバイスを提供している。

第17章「Qアノン」で取り上げているQアノン陰謀論は、歴史上最もめまぐるしく変化する陰謀論かもしれない。Qアノンは子どもを誘拐する秘密組織が世界を支配していて、ドナルド・トランプが謎の人物「Q」の援助によって、それを雄々しく止めようとしているという奇妙な設定の陰謀論だ。この章ではまず最初にファクトチェックに対して免疫を持っている人々と話をするときの実用的なアドバイスを提示した。またこの説の起源を追うと、何百年も昔の反ユダヤプロパガンダまで遡れることがわかった。

第18章「コロナウイルス」はCovid-19の発生源を巡る陰謀論と政府の対応、とくにワクチンについての説も取り上げている。150年以上に渡るワクチン懐疑を概観した。これは今後も消えそうにないが、一方で、この話題についてより良い会話をする方法もある。また突然死、コロナウイルスは研究所で発生した説、増加しているコロナに関しての「ディスインフォーマンタリー」についても取り上げている。

第19章「UFO」は、驚くことに、政府が宇宙人とのコンタクトについての知識、空とぶ円盤のビデオ、宇宙人の死体などを隠蔽していると信じる人々が復活している状況を取り上げ、2017年のニューヨークタイムズの記事に始まるこの変化の背景を探っている。証拠としてあげられているもののお粗末さを理解するための手がかりとして、私が行った調査事例をあげている。UFO 研究家の「信心」は非常に深く個人的なものであることが多く、これについて話すときの視点とアドバイスも記している。

第4部では友人の救出中に直面する可能性のあるさらに複雑で困難な事態について見ていて、最後はデバンキングの未来について述べている。

第20章「デバンキングに潜む複雑さ」では最初に複雑な問題について、(本人に責任があるわけではないが) 飲み込みの悪い人に説明するというよくある問題について検証している。友人が自分とは違った方向に動いている親密な家族の一員で、今後長期的に重大な変化が起こる可能性がある場合はさらなるやっかひさが持ち上がる。ここではモルゲロンズ病説によって起こる問題を取り上げて、メンタルの病気に対応する場合の簡潔なアドバイスを提供している。最後に陰謀論の世界にも関与している政治的な意見の相違にどう対処するか の考察とガイドで締めくくっている。

第21章「デマとデバンキングの未来」は、一部は推測を含むが、2016年の大統領選におけるディスインフォメーションの影響の背景と現在まで続く反響にしっかりと基づいている。ネット荒しとボットがいかに陰謀論を広げ、今後も改善される前にさらに悪化していくだろうことを検討している。

結論ではオンラインの誤情報と戦うために開発中のツールと、これが陰謀論主義の流れを変える可能性に希望を託している。